

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

おぐし沢遺跡

1978

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

おぐし沢遺跡

1978

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

近年、高度経済成長とともに前代未聞とも言うべき開発の波が我が郷土伊那市にも及んできました。このなかで、文化財に関連する数多くの調査報告書を刊行してまいりました。

今回、ここに報告するおぐし沢遺跡発掘調査は、西部開発事業（県営畠地帯総合土地改良事業）の一環として行なわれました。

当横山部落の調査は今回が最初であったために山麓地帯の集落構造が把握できるものとして期待をよせていました。発掘調査を実施してみると、思ったより、最初の水田造成の折に破壊されてしまったとみて、集落構造を述べるのにいたらなかったことは誠に残念に存じます。

発掘調査は団長に友野良一先生を依頼し、12月下旬に行ないました。連日の酷寒に悩まされたが、ここに調査報告書を見るにいたったことは誠に喜ばしい次第であります。

最後に、快く御指導頂いた県教育委員会並びに南信土地改良事務所、連日、熱心に調査に当られた調査員、作業員の皆様に対し感謝の意を捧げます。

また、この報告書を見ずに多界された松沢一美先生、辰野伝衛先生にこの報告書の刊行を知らせ、安らかに眠れと祈念するものであります。

昭和58年3月8日

伊那市教育委員会

教育長 伊 沢 一 雄

凡 例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴なう、県営畠地帯総合土地改良事業で、第5次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、また、国、県、市の補助金のもとに伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和52年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美 田畠辰雄

◎図版作製者

○遺構及び地形

友野良一 飯塚政美 田畠辰雄

○土器拓影及び実測図

友野良一 飯塚政美 田畠辰雄

○石器実測図

田畠辰雄

◎写真撮影

○発掘及び遺構

友野良一 飯塚政美 田畠辰雄

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

目 次

序

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 環 境 (1~ 3)

　　第1節 位 置 (1)

　　第2節 地形・地質 (1)

　　第3節 周辺遺跡との関連 (1~ 3)

第Ⅱ章 発掘調査の経過 (4~ 5)

　　第1節 発掘調査の経緯 (4)

　　第2節 調査の組織 (4)

　　第3節 発掘日誌 (5)

第Ⅲ章 造 構 (6~12)

　　第1節 住居址 (6~ 7)

　　第2節 土 坩 (7~12)

第Ⅳ章 造 物 (13~15)

　　第1節 土 器 (13)

　　第2節 陶 器 (14)

　　第3節 石 器 (14~15)

第Ⅴ章 ま と め (16)

挿 図 目 次

第 1 図	竜西地区遺跡分布図	(2)
第 2 図	地 形 図	(3)
第 3 図	遺構配置図	(6)
第 4 図	第 1 号住居址実測図	(7)
第 5 図	第 1 号土塁実測図	(8)
第 6 図	第 2 号土塁実測図	(8)
第 7 図	第 3 号土塁実測図	(9)
第 8 図	第 4 号・5 号土塁実測図	(9)
第 9 図	第 6 号土塁実測図	(9)
第 10 図	第 7 号土塁実測図	(10)
第 11 図	第 8 号土塁実測図	(10)
第 12 図	第 9 号土塁実測図	(11)
第 13 図	第 10 号・11 号土塁実測図	(11)
第 14 図	第 12 号土塁実測図	(12)
第 15 図	第 13 号土塁実測図	(12)
第 16 図	第 14 号土塁実測図	(12)
第 17 図	土器拓影	(13)
第 18 図	陶器実測図	(14)
第 19 図	石器実測図	(15)

図 版 目 次

図 版 1	遺跡全景
図 版 2	遺構及び遺物出土状況
図 版 3	遺 構

第1章 環 境

第1節 位 置

おぐし沢遺跡は、長野県伊那市大字伊那横山部落に所在しています。遺跡地までの道順としては伊那市街地より、小沢川に沿って、西方へ4km程行くと、眼前に南北に走る中央高速道路のハイウェイがみえ、さらに、同河川にはコンクリートの生々しさの残る橋梁の姿が眼に映える。これらのものは現代の日本高度成長の成果を如実に物語っている。この橋の附近の集落が小沢部落である。この附近から小沢川の両河岸段丘も高くなり、したがって、道路の曲折する個所も増す。このような情景を左右に見ながら西方へ4km程さか登っていくと、谷間に一大集落が見える。これが平沢部落である。いままで登ってきた道をさらに西方へいくと、芝原、南沢、与地部落の北沢を経て、最終的には權兵衛峠へと続いている。この部落の中央部附近にかかると小沢川の橋を渡り、右岸段丘のまがりくねった道を登り、段丘の上に出る。この一帯は、上原と呼ばれ、一面の水田地帯になっている。この地点にくると、西方の山麓線状に横山部落の集落がみえる。この集落の東のはずれが遺跡地であり、台地状になっている。遺跡の名称となっているおぐし沢はこの台地の北側をぬうようにして流れている。

第2節 地形・地質

伊那市横山地区は、竜西の小黒川左岸段丘面、小沢川右岸段丘面、山麓扇状地の三つの条件の重なった場所である。「小黒川は木曾山脈茶臼山や将棋頭（標高2,727m）の沢水を集めて、その源を成し旧西春村と伊那市の境界を東流して、天竜川に流れ込んでいる。その距離は約11.5km、公配は急であり、上流部に岩層が多い、急流で、他の河川に比して洪水時も土砂の流出が少ない。内薙発電所があり、水力発電を利用していている。一方、小沢川は權兵衛峠を中にはさんだ南沢と北沢から流れ出るが、伊那市平沢の芝原で合流し、途中小沢で西天竜と合わせて伊那市内を流れ天竜川に達する。全長11km、南沢には南沢鉱泉がある。上流は崩壊箇所が多く、洪水の場合土砂や礫が一時的に多く流出する。」上伊那郡誌自然篇による。

遺跡地の微地形は山麓扇状地の押し出しによる堆積土の上、また、沢水を集めて流れるおぐし沢の南側舌状台地上にある。

第3節 周辺遺跡との関連

横山部落周辺に点在する遺跡は7個所あり、それは第1回竜西地区遺跡分布図により、④の北方、⑤の矢塚畠、⑥の八人塚、⑦のおぐし沢、⑧の丸山清水、⑨の穴沢、⑩の開畠の各遺跡である。北方遺跡は縄文中期、矢塚畠遺跡は縄文中期、おぐし沢遺跡は縄文中期、丸山清水遺跡は縄文中期、穴沢遺跡は縄

文中期、開墾遺跡は繩文中期である。

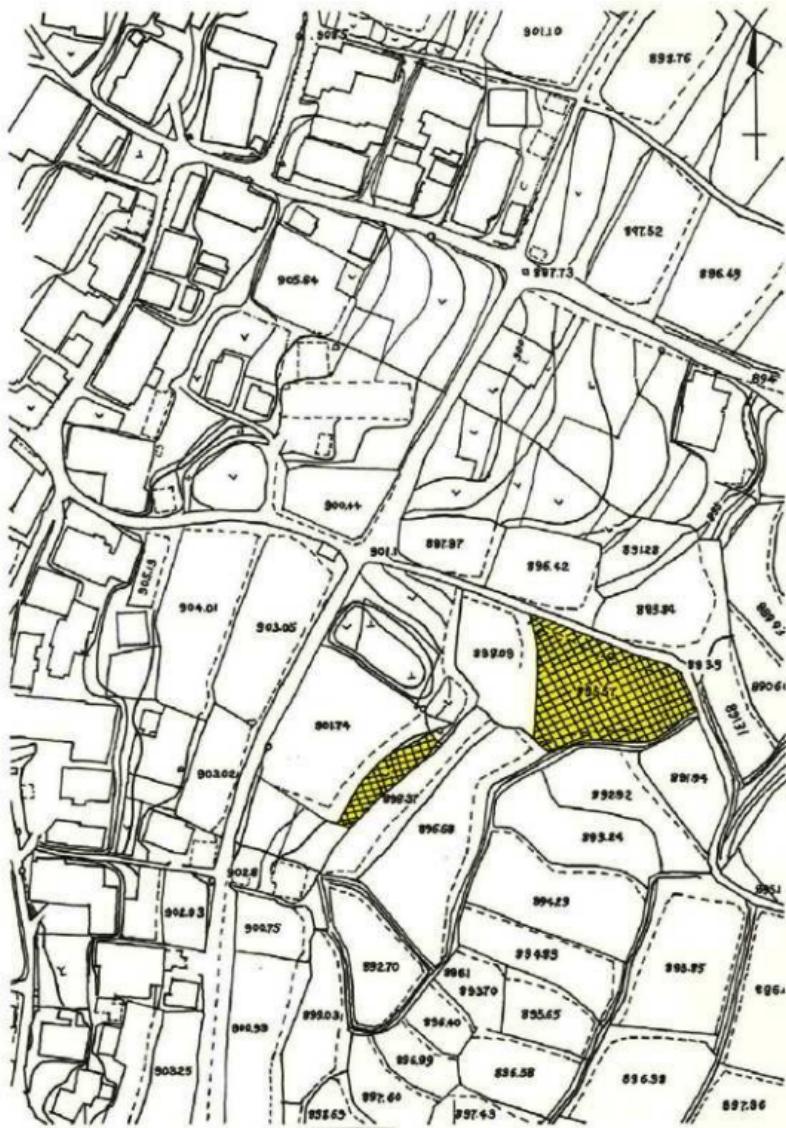
(飯塚政美)



第1図 龍西地区遺跡分布図

遺跡の名称

1 北割田	2 代古屋	3 烟金鋪	4 財木	5 藏鹿山駿	6 稔ヶ岳麓	7 西笠輪小学校	8 大豈西	9 西安輪媛媛学校	10 西安輪媛媛学校	11 熊野神社	12 富士塚	13 在高	14 久保家	15 家根	16 家根	17 家道	18 桜	19 敷里庄	20 天戸2	21 上庄	22 天溝2	23 船渠の	24 下渠	25 堂土原	26 売士原	27 宮道の	28 烟道の	29 上の花	30 小の花	31 中の花	32 地山原	33 与北	34 北塚	35 矢八塚	36 富士塚	37 おぐし沢	38 丸山清水	39 穴	40 ますみヶ丘上	41 船渠平	42 川渠平	43 川渠平	44 士原手	45 士原手	46 ますみヶ丘	47 ますみヶ丘	48 伊勢	49 八人塚	50 狐塚南	51 狐塚北	52 狐塚南	53 小黒塚	54 富士塚	55 城	56 小沢	57 小沢	58 月見松	59 月見松	60 ウダイス	61 上尾	62 高鳥石	63 尾原塚	64 今原	65 今原	66 かんぜん	67 墓	68 御宮	69 清牧	70 山神	71 小黒塚	72 富士塚	73 水代	74 平	75 本寺	76 開城	77 常宮	78 山常	79 上東城	80 下村	81 墓	82 神社	83 墓	84 墓	85 部	86 南前	87 前	88 本寺	89 方	90 墓	91 東城	92 墓	93 墓	94 墓	95 墓	96 墓	97 墓	98 墓	99 墓	100 墓
-------	-------	-------	------	--------	--------	----------	-------	-----------	------------	---------	--------	-------	--------	-------	-------	-------	------	--------	--------	-------	--------	--------	-------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	-------	-------	--------	--------	---------	---------	------	-----------	--------	--------	--------	--------	--------	----------	----------	-------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	------	-------	-------	--------	--------	---------	-------	--------	--------	-------	-------	---------	------	-------	-------	-------	--------	--------	-------	------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	------	-------	------	------	------	-------	------	-------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------



第2図 地形図 (1:1500)

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畠地帯総合土地改良事業）は伊那市竜西地区を区画整理する大規模な事業であります。当横山地区は本年度より実施され、工事地区内におぐし沢遺跡が該当し、秋の収穫後に着工する運びとなつた。

西部開発（県営畠地帯総合土地改良事業）の遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市教育委員会を中心に、おぐし沢遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて事務を遂行することとした。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

おぐし沢遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢 一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢 繩一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	坂井 喜夫	伊那市教育委員長
"	原 益久	南信土地改良事務所長
"	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	有賀 武	" 課長補佐
"	米山 博章	" 係長
"	三沢 真知子	" 主事

発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会員
"	御子柴 泰正	"
調査員	小池 政美	"
"	田畠辰雄	"
"	辰野 伝衛	"
"	福沢 幸一	"

第3節 発掘日誌

昭和51年12月15日 伊那市内では西はずれの横山部落の東端の地にあるおぐし沢遺跡の発掘となつた。この地では、発掘は初めてであったために、着手する前に一束の不安はあったが、地形的な条件からして、遺跡の存在しそうな沢に面した南側の地に設定する。地点が決まつたので、ブルトーラーを入れて、耕土剥ぎをする。ブルトーラーを入れたあと、ただちにグリット設定にとりかかる。

昭和51年12月16日 それぞれのグリットから、少量の遺物が出土した。それは、鐵文早期、櫛文中期、灰陶陶器、内耳片であった。グリットを掘り進めていく段階で、ところどころに黒々とした落ち込みがみられ、その数は14箇であった。名称を第1号土塗から、第14号土塗までつける。それらの土塗のグリット番号は番1号土塗はK3、第2号土塗はJ4、第3号土塗はD3、第4号土塗はI6、第5号土塗はI6、第6号土塗はG6、第7号土塗はF8、第8号土塗はH11、第9号土塗はF12、第10号土塗はF15、第11号土塗はE15、第12号土塗はD16、第13号土塗はD17、第14号土塗はB18であった。

昭和51年12月17日 第1号土塗から第5号土塗まで掘り下げ及び完掘を終了する。グリット設定地区より、やや離れた水田の東端の畔の場所を掘り下げていくと、灰陶陶器を伴なう住居址が発見され、これを第1号住居址とした。この住居址は水田造成の折り土手によってこわされたとみて東半分は完全に破壊されていた。

昭和51年12月18日、第6号土塗から第14号土塗までの掘り下げ及び清掃をする。第1号住居址の掘り下げ及び完掘を終了し、さらに清掃をする。明日は写真を朝から撮るように全遺構にシートをかけておく。シートは黄色、青色、赤色と12月の寒氣厳しき大地に色どりを添えていた。

昭和51年12月19日
第1号土塗から第6号土塗まで清掃をする。昨日までに清掃をしておいた遺構も霜柱によって、大分よごれていたので新めて清掃をする。第1号土塗から第14号土塗まで、第1号住居址の写真撮影、第1号土塗から第14号土塗までの平面及び断面実測。

昭和51年12月20日
第1号住居址の実測と全測図の作製をする。

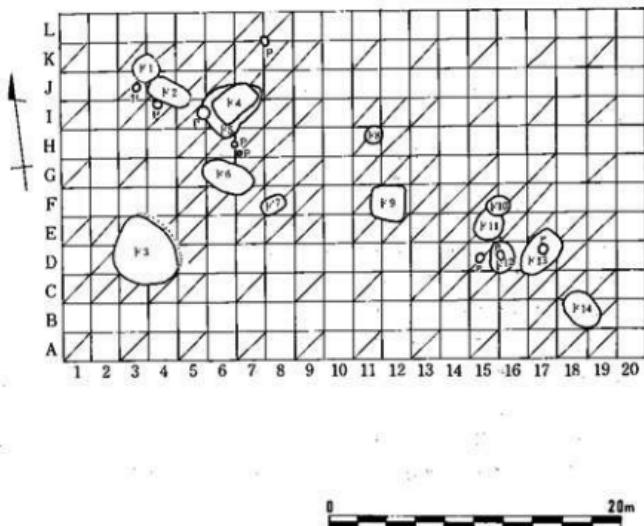
(飯塚政美)



発掘風景

第III章 遺構

第1節 住居址

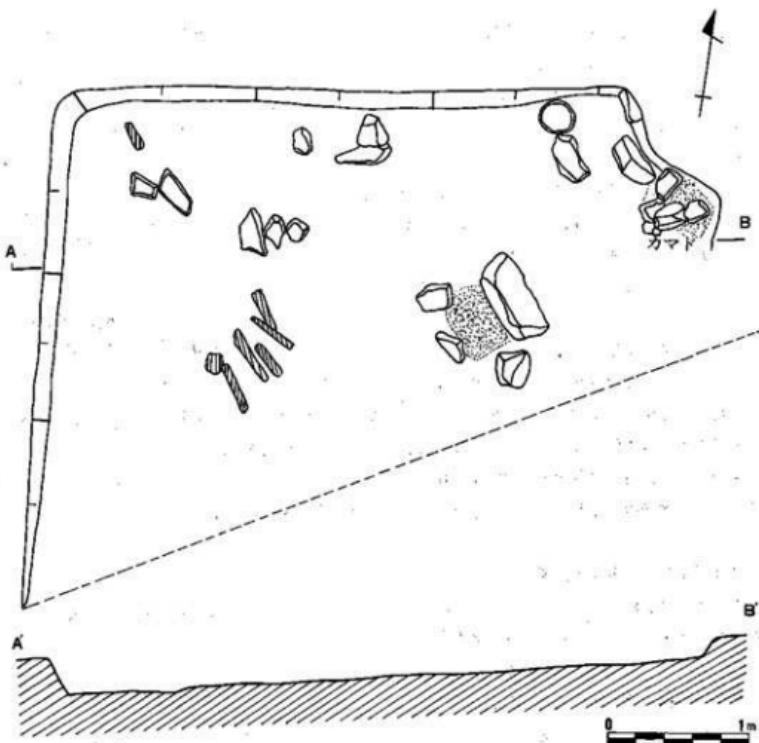


第3図 遺構配置図

第1号住居址（第4図、図版2）

発見された遺構のなかでは、当初に設定したグリット外、また最も南側に位置している。本址は南側と東側の一部分を残して、水田造成の折に破壊されてしまって、その影すら残存していなかった。本址は、規模は前述したようなことで、確定なるものは把握できないが、推定によれば、南北3m90cm程、東西4m50cm程であると思われる隅丸方形プランで砂礫混りの黄褐色土層を掘り込んだ堅穴住居址である。壁高は深いところで25cm程、浅いところでは15cm程であり、その状態は内傾が割合に強かった。

床面は全般的には水平であったが、水田造成の折りに、大部分、破壊されたとみえて、荒れが、顯著であった。構築当時には数本の柱穴があったと思われるが、発掘した段階では、前述したような状況であったために検出できなかった。床面直上と推定できるレベル面に、火災にあったと思われる程に、多量の焼土と炭化物が検出された。カマドと推定できる遺構は、東壁の中央部附近より、若干北側によった位置に発見された。石組粘土カマドであったと思われて、石組、粘土が無残な姿が発見されたのにすぎなかった。床面上より灰陶陶器が出土し、よって本址は平安時代の住居址と思われる。



第4図 第1号住居址実測図

第2節 土 塚

第1号土塚（第5図）

この土塚は、設定したグリット内の最北部で、J 3～J 4、K 3～K 4にかけて、さらに南側で土塚2と接した場所に位置している。表土面より30cm位下った砂疊混合の黄褐色土層を掘り込み、南北75cm、東西1m5cm程の規模で長円形状のプランを呈している。深さは30cm程である。壁の状態は全般的には内縛気味である。床面は叩き状になっており、中央部が若干高くなっているが、全般的には大体平坦であった。覆土中より少量の炭化物の検出をみたが、遺物は何も出土しなかった。西側のP1は本土塚とは直接的な関係はないようと思われる。

第2号土塙（第6図）

この土塙の北側は第1号土塙と接し、第4号土塙と第5号土塙と隣接している。砂礫混合の黄褐色土層を掘り込み南北1m10cm、東西1m50cm程の大きさを有し、その平面プランは円形を呈し、深さは8.5cm程の円筒状を呈している。

壁面の状態は上部は垂直に近く、下部は若干、内縛気味であった。床面は叩き状になっており、こまかに凹凸が認められたが、ほぼ水平となっていた。覆土中より少量の炭化物の出土はみとめられたが、遺物は何も出土しなかった。

第3号土塙（第7図、図版3）

この土塙は、発見された土塙14基の中では、最西部に位置し、単独な状態で検出された。プランは卵形状を呈し、規模は南北2m50cm、東西2m5cm程を計測し、深さは約9.0cmと深かった。北壁は壁上部は垂直に近く、下半分部は断面袋状、南壁は内縛気味を成していた。

床面は砂礫混合土の黄褐色土で構築され、かたいタタキになっており、水平を呈していた。覆土中より多量の木炭の出土をみ、さらに遺物として、中世時代の内耳土器片の発見をみた。

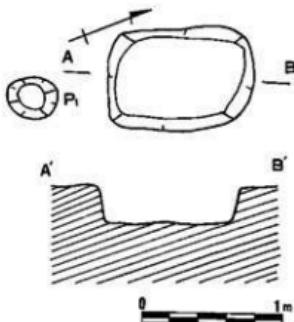
第4号土塙（第8図、図版3）

この土塙は砂礫混合土層面を切り込み、さらに第5号土塙を切って構築してある。平面プランは隅丸長方形で、その規模は南北1m5cm程、東西1m8.5cm程、深さは3.0cm位である。

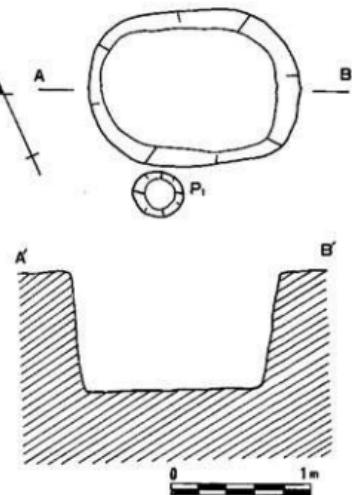
壁は東壁は内縛気味、西壁は内傾が強い。床面は中央部がわずかに高くはなっているが、全般的には水平と考えてよかろう。遺物は何も出土しなかったが、覆土中より多量の炭化物が検出された。

第5号土塙（第8図、図版3）

この土塙は遺構の中央部を第4号土塙によって切られ、砂質混合土層を掘り込んである。規模はへっこんだ部分では南北1m4.5cm、とび出した部分では南北1m6.0cm程、東西3m5cm程で、深さは2.0～2.5cmを計測でき、長円形状プランを呈している。

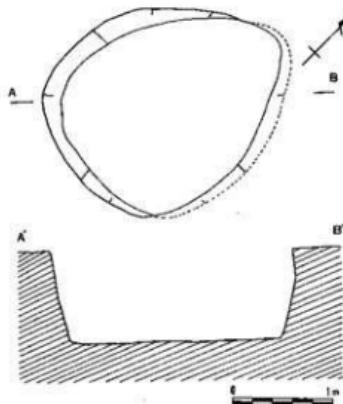


第5図 第1号土塙実測図

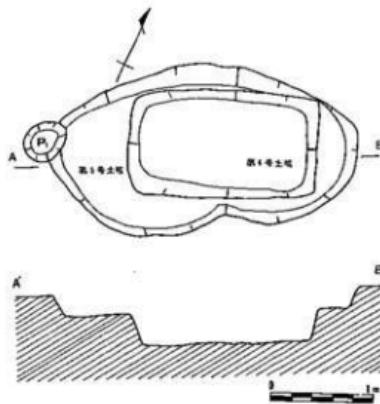


第6図 第2号土塙実測図

壁は東壁、西壁とも内弯気味であった。床面はわずかに弯曲状の起伏がみられ、かたいタタキになっていた。遺物の出土は全くなかったが、覆土内より少量の炭化物が検出された。



第7図 第3号土塙実測図



第8図 第4号・5号土塙実測図

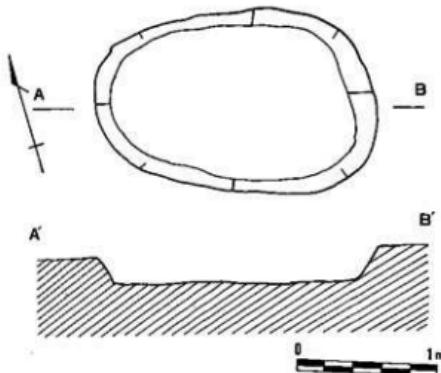
第6号土塙（第9図）

第4号土塙、第5号土塙の南側、第7号土塙の北西部にはさまれるようなかっこで検出された土塙である。砂質混りの黄褐色土を掘り込み構築されており、その規模は南北1m30cm程、東西2m程、深さは20cm～25cm位であって、円形プランを呈している。壁は東側は内傾で、西側は内弯状となっている。床面は黄褐色土層面につくられ、わずかな凹凸は認められるが、大般水平で、さらにかたいタタキになっていた。

遺物の出土は全くなかった。ただ、覆土中より、少量の炭化物と焼土が認められた。

第7号土塙（第10図）

本遺構の北西では第6号土塙に隣接して検出された土塙である。南北6.5cm、東西9.0cm程の規模を有し、深さ20cm程の円形を呈している。壁は西側、東側とともに内弯し、わずかなタタキになっていた。



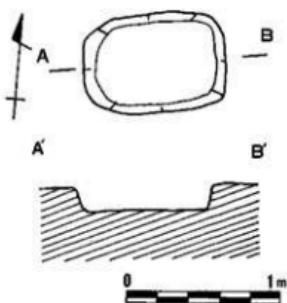
第10図 第7号土塙実測図

床面は、西側の一部分が凹むが、その他は大体水平で、かたくたかれていた。覆土中より多量の炭化物の検出をみたが、遺物の出土は全くなかった。

第8号土塙（第11図）

本遺構はH11グリット内に検出された土塙である。南北1m35cm、東西1m35cm程の規模で、円形プランを呈しており、深さは20～25cmである。壁の状態は西側は上部にわずかに凹みがあり、東側は内傾気味。

床面はかなりかたいタタキになっており、東側より西側へわずかに傾斜している。覆土中より少量の炭化物の出土、遺物の出土は全くナシ。



第10図 第7号土塙実測図

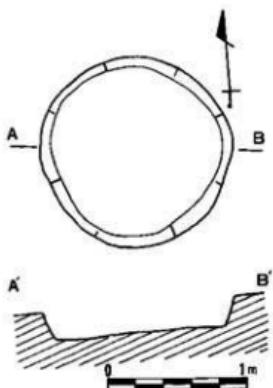
第9号土塙（第12図）

この遺構はE11～E12、F11～F12の4つのグリット内にわたって位置し、表土面より30cm位下った黄褐色土層面を掘り込んだ土塙である。プランは南北1m20cm、東西1m20cm程の規模で、深さ20cm程の隅丸方形を呈している。壁面はわずかに内傾気味であり、壁面下部には細縫が露出していた。床面はわずかな叩きになっており、凹凸も認められた。覆土中に多量の炭化物が検出された。遺物は何も出土しなかった。

第10号土塙（第13図）

この遺構は南側で第11号土塙に接し、第11号土塙を切っているような状態で発見された土塙である。切り込み面は表土層より30cm位下った砂疊混合土層面である。規模は南北85cm、東西90cm程を有し、円形プランを呈し、壁高は北側で30cm、南側では10cm程である。壁面は北側は内傾し、南側は内傾している。

床面はわずかに起伏があり、かたいタタキになっている。覆土中より多量の炭化物の出土をみたが、遺物の出土は何もなかった。



第11図 第8号土塙実測図

第11号土塙（第13図）

本土塙は表土面より30cm程下った砂疊混合土層面を掘り込み、北側は第10号土塙に切られている。平面プランは長円形を呈し、その規模は南北1m90cm、東西1m50cm程壁高は北側は第10号土塙との切り合い関係のために破壊さ

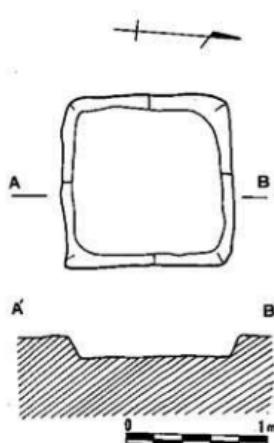
れたとみえて、現在高は数cm、南側は20cm位である。壁の状況はわずかに内傾している。床面は部分的に凹凸があり、かたくたかれている。

第12号土塙（第14図）

この遺構は東側に第13号土塙、北側に第11号土塙、第10号土塙と接近して築構され、プランは円形を呈し、南北1m25cm、東西1m5cm程、壁の深さは南側20cm、北側は25cm前後を計測できる。

壁の状態は内彫が強く、壁面下部には、微跡から拳大程の礫が露出していた。床面はわずかな叩きがあり、だいたい水平を呈している。床面の中央部と思われる位置に直径3.0cm程、深さ2.5cm位のピットが穿けてあった。

覆土中に微量ではあるが木炭を検出した。遺物は何も出土しなかった。



第12図 第9号土塙実測図

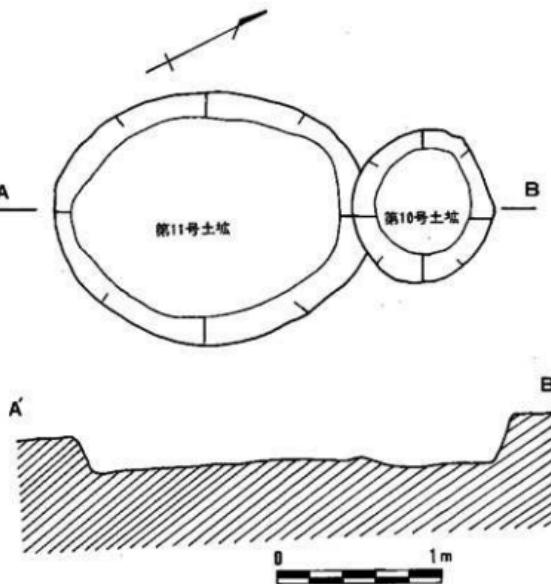
第13号土塙（第15図）

この土塙は砂礫混りの黄褐色土層を掘り込み、西壁は第10号土塙、第11号土塙、第12号土塙に接近して検出された。

プランは長円形、規模は南北1m80cm、東西1m20cm程、深さは20cm程を測定できる。

壁の状況は内傾が強い、壁面は大小、さまざまな礫で表面が覆われている。床面はわずかな叩きになっており、大般、水平となっていた。

遺物は何も出土しなかったが、覆土下層面より少量の木炭と焼土が検出された。



第13図 第10号・11号土塙実測図

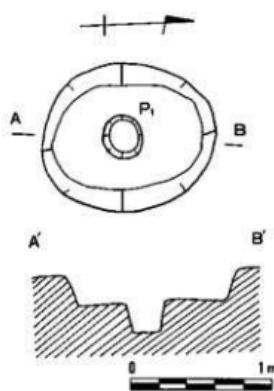
第14号土塙（第16図）

この遺構は砂礫混合の黄褐色土層面を掘り込み、土塙としては、最南部、最北部に位置していた。プランは東西に長い長円形状を成し、その規模は南北90cm、東西1m55cm程度深さは25cm程度を測定できる。

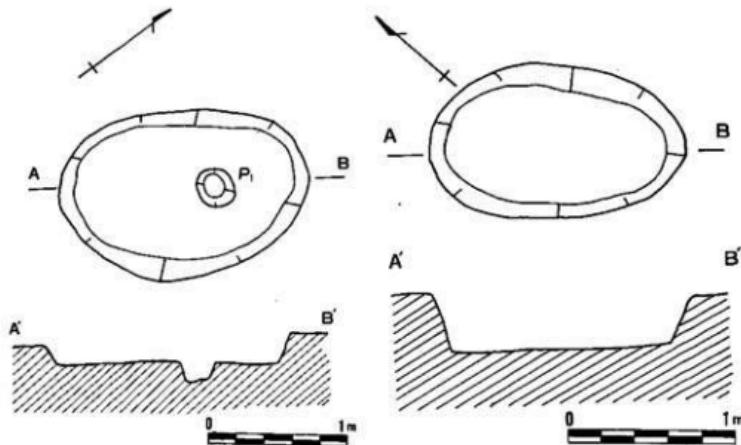
壁面は西壁は中央部附近が若干とびだし、反対に東壁はへこんでいるが、両壁とも全般的に内傾が強い。細礫が壁面全般を覆っているために、ザラザラしていた。床面は、わずかなタタキになっており、中央部よりやや西側は若干高くなっていた。

覆土である黒土層に混じって多量の木炭と、焼土が赤々と鮮えていた。ただし、遺物は何も出土しなかった。

（飯塚政美）



第14図 第12号土塙実測図



第15図 第13号土塙実測図

第16図 第14号土塙実測図

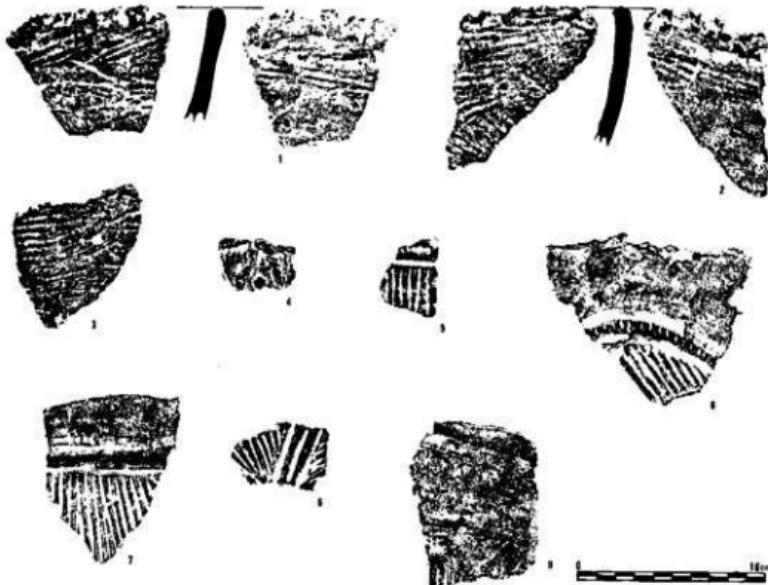
第IV章 遺物

第1節 土器

貝殻条痕文土器及び多量の繊維を胎土に含んでいることを特徴とする土器の一群 第17図(1~3)
(1~2)は貝殻条痕が両面に、さらに、口縁部上部には刻目をつけてある。色調はいずれも黒褐色を呈し、焼成は良好、この一群は縄文早期末葉の茅山系統に含まれている。

縄文中期中葉の勝坂期に含まれている一群(4~6)、4は器面の全面にわたって、低い隆帯をつけ、その縁に刻目を施してある。さらに、それらのなかに円形竹管文を加筋してある。5は破片上部に横帯の連続爪形文を下部には縦位の沈線文を施してある。6の破片上部は無文を、下部はいわゆる櫛形文を構成してある。色調は黄褐色(4~5)、赤褐色(6)を呈し、焼成は中位である。

縄文中期後葉の加曾利E期に含まれている一群(7~9)、(7)の破片上部は無文、中部は横位の隆帯、下部は沈線が斜走している。(8)は破片全面にわたって隆帯や沈線が附加してある。9は大部分は無文で、わずかに左肩の一角に沈線文がみられる。
(飯塚政美)

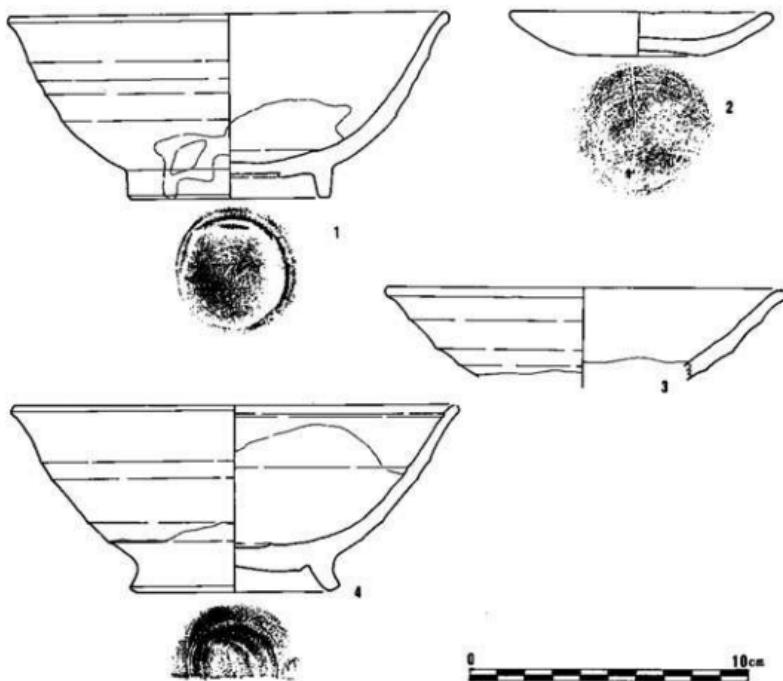


第17図 土器拓影

色調は7は黒褐色、8は赤褐色、9は黒褐色を呈し、焼成は全て良好である。

第2節 陶 器

第18図に記載されているものは、灰釉陶器が大部分であったために陶器として考えた。同図の(1、4)は第1号住居址より出土したもので、ともに楕の器形を成している。1は口径15.8cm、4は口径16.1cmを計る。3はグリット内より出土した碗形の灰釉陶器である。口径は14.9cmを計り、底部は欠損している。(2)は土師器の皿である。



第18図 陶器実測図

第3節 石 器

今回、発掘した地点での出土石器の総数は5点であり、その形態からして機能分類をしてみると次

のようになる。それは疊器、棒状石器、磨製石斧、石匙、砥石の5種となろう。

疊 器（第19図(1)）

円疊の左半部を打ちかいて手を加え、うちかたい一部にわずかに刃をつけてある。石質は硬砂岩である。

棒状石器（第19図(2)）

縦長の緑泥岩を半分に打ち欠いて調整し、石器としてある。

磨製石斧（第19図(4)）

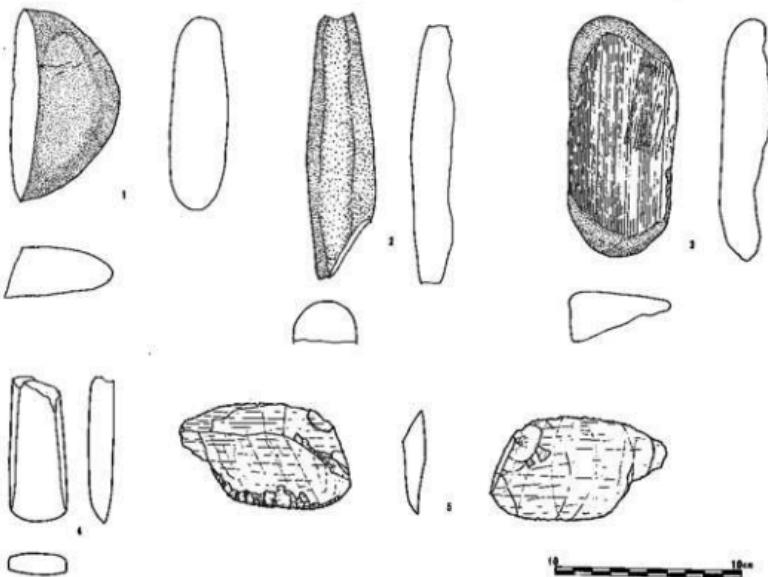
小型の定角磨製石斧であり、刃部は極めて鋭角となっている。頭部は欠損している。石質は蛇紋岩である。

石 匙（第19図(5)）

石匙としては横刃形に属し、刃部は丁寧に調整してある。頭部の方は一部分が欠損していた。石質は青チャートである。

砥 石（第19図(3)）

油性の強い石質を用い、極めて円滑に表面を加工してある。形からして、どうも本砥石は中世風の感が強いくらいと思われる。



第19図 石器実測図

第V章 まとめ

おぐし沢遺跡は、大きくいえば小沢川右岸段丘面に、小さくいえばおぐし沢の南側舌状台地面に位置する。遺跡はおぐし沢の流れに沿って東西に分布している模様であった。

今回の調査によって、平安時代の住居址1軒、土塙14基を検出し、縄文早期、縄文中期、平安時代、中世と長きにわたる遺物が出土したことは大きな成果であった。

縄文時代早期の土器片は3片発見され、両面に貝殻条痕文の施されていることから、茅山上層式に位置していると思われる。この時期に附隨する石器としては、礫器、棒状石器、石匙が考えられよう。

縄文中期の土器片は勝坂式や加曾利E式と呼ばれている一群である。前者のは信州では藤内式、井戸尻式、後者のを曾利式と呼んでいる。

灰釉陶器の碗は平安時代末期のものと思われる。このなかに混じって、土師器の皿が出土しているが、同時期のものと考えてよかろう。

中世時代の遺物としては少量ではあるが内耳土器片が出土している。

これは遺跡地の西方の高い山に城がある。この城は鳩吹城と呼ばれている。この城は大田山の山頂1,320mの所にある。史実に出てくる大徳王寺城の戦いが、この城であるという一説が考えられている。（信濃勤王史攷）

いままでに、出土遺物からしてみて、各時代にわたって述べてきたが、いままでに手のとどかなかった山間地帯にも、各時期にわたって住民の生活の場が営まれていた事実に今後の研究の上で、大きな期待が持てそうな感じが強いように思われる。

最後に、この発掘に全面的な御指導を下さった長野県教育委員会、南信土地改良事務所、現場での作業に労苦をかけた団長友野良一先生、各調査員並びに作業員一同に対し、心から感謝を申し上げる次第であります。

（飯塚政美）

図 版



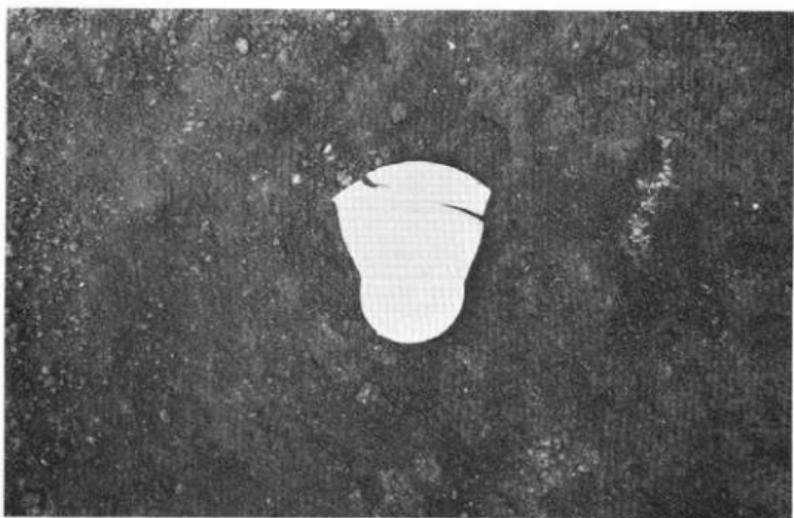
遺跡地を南側より眺む



遺跡地近景

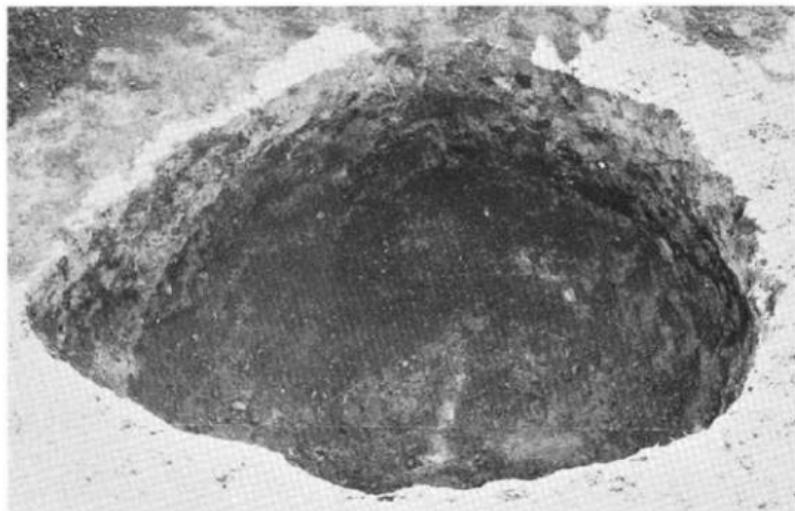


第1号住居址

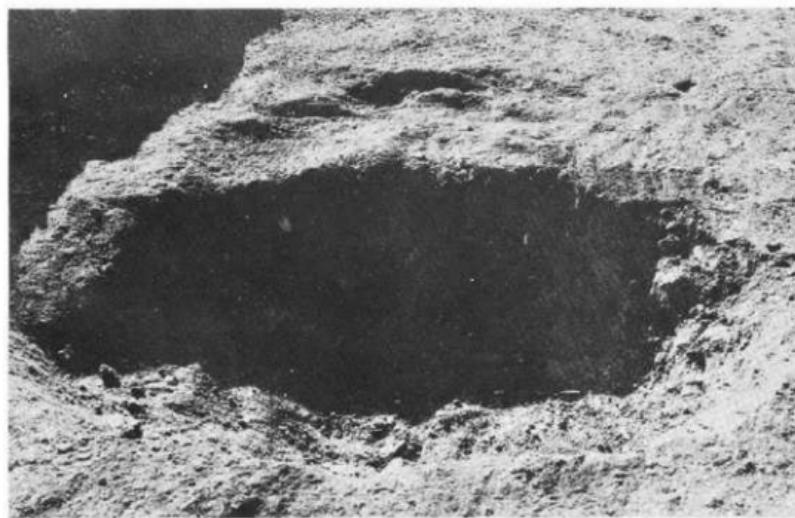


灰釉陶器（第1号住居址）

図版2 遺構及び遺物出土状況



第3号土塗



第4・5号土塗

おぐし沢遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和53年3月15日 印刷

昭和53年3月20日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県伊那市下春日町

(有)千代田印刷

